

名城大学 経済・経営学会会報

No.30

『名城論叢』
第八巻 第二号 付録
二〇〇七年九月二八日
名城大学 経済・経営学会 発行

イタリア産業遺産見聞録

(テルニ／ローマ)

経営学部 宮崎 信二

一 二〇〇〇トンプレスの威容

国際産業遺産保存委員会 (The International Committee for Conservation of the Industrial Heritage: TICCIH) の一三回国際会議 (TICCIH 2006) が、二〇〇六年九月にイタリア・ローマ近郊の小都市テルニ (Terni) で開催された。TICCIH は、一九七八年にストックホルムで設立され、現在、ヨーロッパ・北アメリカを中心に六〇カ国五〇〇名以上の会員を擁する産業遺産に関する唯一の国際組織であり、三年に一度、国際会議が開催される。今日、島根県石見銀山のユネスコ世界遺産登録などで産業遺産への関心が高まるなか、「TICCIH 2006」への参加を見聞録としてまとめ、海外での産業遺産の保存・再利用等の取り組みを紹介しよう。



(写真1 テルニの町の象徴、12000トン水圧プレス機)

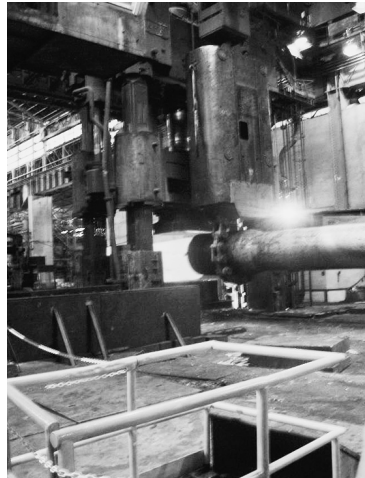
テルニは、今回の「国際会議」まで、正直に言って、全く名前も聞いたことがなく、地図を探してもなかなか見つからなかった。むしろ、なんでこんな地方都市で「国際学会」を開催するのか不思議に思った。しかし、ローマから普通列車で約一時間三〇分ぐらいのどかな田園風景を眺めながらウンブリア州のテルニの「小さな駅舎」を出てとたん、その疑念は吹っ飛んでしまった。その駅前には、二二〇〇〇トン水圧プレス機(写真1)が威風堂々の姿をあらわした。一九世紀末からの製鉄町

であり、イタリアで最初の近代的な鉄鋼工場で、一九三五年から一九九一年まで使用されていた。テルニ・ジアアントゥと呼ばれた、二二〇〇トン、プレス機は、テルニの「町の記念碑」として、二〇〇〇年駅前に移設されたのであった。現代のスフィンクスを思わせるその「圧倒的な威容」に、ただただ「己の無知」を恥じるだけであった。

しかし、「町の記念碑」としての二二〇〇トンプレス機には、別の意味が込められていたことを、後に知る。第一次大戦時までにイタリアの軍需工場として砲弾や装甲ドーム（また日露戦争時に活躍した巡洋艦「春日」の装甲板）など作る重要な軍需用の国営製鋼工場を中心に、電気化学などの重工業地帯として発展したテルニは、第二次世界大戦時の一九四三年八月、連合軍から激しい空爆を加えられ大きな被害を被ったのである。そうした意味でも二二〇〇トンプレス機は、テルニの「町の記念碑」であるように思われる。現在、同工場はThyssen Krupp 特殊鋼工場 (Termi) となっているが、「国際会議」中に見学でき、稼働中の二二六〇〇トンプレス機の迫力ある姿を間あたりにすることが出来た事は、とてもラッキーであった（写真2）。

二 「TICCIH 2006」とテルニの産業遺産

しかし、「TICCIH 2006」がテルニで開催されたのは、「町の記念碑」としての二二〇〇トンプレス機の保存だけにあった訳ではな。 「TICCIH 2006」のテーマそのものにあった。



（写真2）現在稼働している Thyssen Krupp 特殊鋼工場の12600トンプレス機）

「TICCIH 2006」は、(一)テルニで開催された国際会議（九月四日から一八日）と(二)ポストコングレスとして企画されたイタリア産業遺産の現地視察（Post-Congress Itinerary）から構成された(三)のポストコングレスの現地視察は、また機会があれば。

国際会議は、ルーマニアやクロアチア等の旧東欧圏を含めたEU、ペルーやブラジルなどの中・南米さらには「極東」の日本、台湾さらに中国からも初めて公式出席があるなど四〇カ国から八〇〇人を超える人びとが参加した。

オープニング・セッションとしての「世界の産業遺産 (Industrial Heritage in the world) の全体会議報告後には、今回のテーマ：「産業遺産と都市の変容」(Industrial heritage and urban transformation)と「生産地域と産業のランドスケープ」

(productive areas and industrial landscapes) に関する分科会、さらに産業遺産保存に関わる一六のワークショップ(産業遺産に関わる調査方法・法律問題、産業遺産の復元、再生・移転、産業遺産の保存と管理、財団・アーカイブ・博物館等、産業の役割と歴史的アイデンティティ、文化観光と産業観光の利用、産業遺産に関する人材・専門家の訓練や技法、産業遺産と「複合的規模」での開発、技能・熟練、専門的・伝統生産、文章保管など)とも個別産業分野―農業・食品、繊維と衣服、鉄鋼・機械、鉱業、化学、エネルギー供給ライン、通信ネットワーク、インフラ―等で約二五〇本以上の報告講演があり、各国・諸地域での産業遺産の保存や再利用、産業観光の現状と問題点などが報告された。さらに、イタリアにおける産業遺産に関する多様なエキジビションが、色々な趣向を凝らして行われ、非常に興味深いものであった。

国際会議が進むにつれて、「TICCIH 2006」の開催地にテルニ選ばれた理由が、なんとなく理解でき始めた。緑豊かなウンブリア州で中世風の古い町並みを今に伝えるテルニは、パドル製鉄の他に手工業的な製粉・皮革業、小規模な綿業や羊毛業を擁していたが、一九世紀末から製鉄業を中心に工業化が進み、二〇世紀にはイタリアで最初の近代的鉄鋼業が発展し、さらにネラ・ヴェリノ(Nera-Verino)河溪谷の豊富な水系を利用した発電所を基盤に炭素カルシウム、アセチレンなどの電気化学工場も建設され、重工業の生産地域として発展し、テルニの「ランドスケープ(風景・風土)」を永遠に「変容」してしまった。会社が、テルニの都市や地域計画に重要な装置の役割を担うよ

うになり、また、会社が労働者の住宅や職業学校、映画館、劇場、スポーツ施設などを擁するようになり、町や地域の経済生活のみならず社会・文化面を決定することとなった。こうした重工業の生産地域としてのテルニにおける工場・発電所・河川流域、さらに住宅や労働者の建物などは、巨大な会社の支配の象徴となり、その役割は一九六〇年代まで続いたのであった。

しかし、この三〇年あまりの間に状況は大きく変化した。町の産業の歴史を担ってきた会社が移転や撤退することによって、多くの工場が「過去の物言わぬ記念碑」となってしまう。それまでテルニのランドスケープ(風景)を構成していた諸工場や建物は、もはや当初の役割がかわり、調和しなくなったのである。しかしながら、これら工業化の象徴は、都市のコミュニティの不可欠な「アイデンティティ」の一部をなしており、工業化の象徴である産業遺産の保存、再生、再利用が、単に約一世紀半の過去のみならず未来の視点からしても、地域の復興や人々の生活の盛衰を左右する不可欠な課題となっていたのであった。

「TICCIH 2006」の国際会議のメインテーマ(「産業遺産と都市の変容」と「生産地域と産業のランドスケープ」)(日本語訳では風景、景色、地形等であるが、この言葉が使用される場合、独自の意味を持たせている)の典型あるいはモデル、すなわち産業遺産の保全、再生による「ランドスケープ」の再形成が、この小都市テルニである。

三 主催者の意気込みと「イタリア」的運営

国際会議では、分科会・ワークシヨップと同時に産業遺産の見学 (Visit) など主催者の意気込みを感じさせる多彩なイベントが催され、猛烈にハードなスケジュールであった。

一日の初日には、テルニ到着後、直ぐに二〇世紀初頭に建設され、現在も稼働するネラー・ヴェリノ (Nera-Verino) 河溪谷の Monte Sant Angelo 水力発電所を見学。次いで、旧電気化学工場 Papigno 跡を再利用した映画スタジオ (Cinecittà Studios) で、テルニやナルニ市長など主催者ら五人のいつものながながとした「歓迎の辞」のオープニング・セレモニーとウェルカム・パーティが催された (写真3)。この電気化学工場は、二〇世紀初頭から創業され一九二〇年代から五〇年代に大規模に操業されていたが、一九九〇年から映画スタジオとして再利用されたものであった。帰路に深夜の一時にかかわらず、雨のなかわざわざ Marmore 瀑布見学が行われ、確かに「一見の価値」があるものであった。

大会期間中の本部である S I R I は、二〇世紀初頭から多様な会社によって使用された後、一九二五年から一九八五年の破綻まで化学の研究を担っていた S I R I (旧イタリア産業研究協会) の一部が、博物館として再生・再利用されたものであり、旧研究所の設備跡を残しつつもイメージを一新し、ワークシヨップや多彩なエキジビションが行なわれた (写真4)。

また、ランチだけのために移動したテルニ・マルチメディア・



(写真3 オープニングセレモニー会場となった旧電気化学工場 Papigno 跡を再利用した映画スタジオ)



(写真4 大会本部、SIRC(旧イタリア産業研究協会)の一部の再利用)



(写真4 現在のSIRC、大会中は本部とエキジビションホールとなる)



(写真4 再利用以前のSIRC)

センターは、一八九〇年に創業された旧 Posco 機械工場 (mechanics workshop) を、一九八五年にテレビや映画のスタジオのための再利用したものであった。どうも、テルニで目にした化学工場や機械工場跡を、製造業にかわりマルチメディアや映像・映画などの新たな産業（創造的産業）に再生・再利用すると言う発想は、一九八五年EUで始められた脱工業化を指した「文化を生かした都市作り」の一連の動きと連動するように思える。

さらに、国際会議における二つの分科の会場である Palazzo Gazzoli や Palazzo di Primavera は、産業遺産ではないが中世風の古い町並みの一角にある建物を最新の設備を備えた会議施設に再利用したものであった（写真5）。テルニの街並みをもても、産業遺産の保存、再利用しつつ脱工業を目指す都市の「ランドスケープ」作りの様子がうかがえた。国際会議中、ホテルや会議場間はバスが運行していたが、イタリア式の何時来かあまり期待できないので、散歩がてらに徒歩で移動した。数万規模の街であるテルニの中心街は、約三〇分前後で歩ける距離であった。テルニは一七・八世紀の町並みとともに個性豊かな服やカバンなどを取り揃えた専門店が連なる商店街（日本の同規模の街でのシャッター商店街と全く趣が違ふ）さらに、一九世紀・二〇世紀の建造物など街全体が落ち着いた雰囲気漂わせていた（写真6）。

ただ、市のパンフレットによれば、これらテルニの「風景」を構成しているものの一部は、一九世紀から二〇世紀にかけての会社の管理者・技術者住宅、労働者の職業学校や労働者住宅



（写真5 分科会場である Palazzo Gazzoli の外観と内部の近代的ホール）

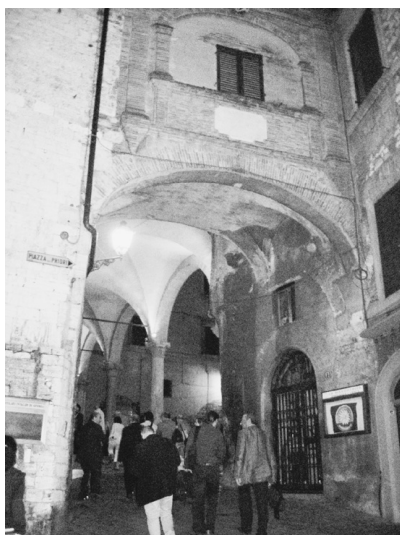


(写真6 落ち着いた雰囲気テルニの中心街。店は10時頃開くので閑散としている。)

を保存したものであった。テルニの町の落ち着いた「風景」は、文化遺産のみならず二〇世紀の工業化のシンボルとしての工場跡を、博物館やイベント会場に再生しさらにマルチメディア・映画など製造業に代わる「創造産業」に再利用し、また労働者住宅・学校等をも都市の「ランドスケープ」の構成要素として組み込み、こうした文化的遺産や産業遺産の保存、再利用を通して、コミュニティに不可欠な「アイデンティティ」を復興・再生した「成果」でもあった。その意味では、『TICCH 2006』の主催者がテルニを選んだのは、イタリア産業遺産の保存・再生・活用の具体的な姿を「世界」に見せたいという意気込みのあらわれでもあり、ハードなスケジュールはその結果でもある。

しかし、イタリアの産業遺産保存の動きが、すべて「理解」できるものでもなかった。例えば、大いに期待したコンサート会場は、共同開催市の一つであるナルニ(Narni)市の薄暗い Herita S. G. L. カーボン工場跡 (Narni Scalo) 倉庫を使ったものであった(写真7)。イタリア・オペラカンツォーネでも聞かせてもらえるのかと勝手に思い込み、日本人作曲家の現代音楽でがっかりこともあったが、なぜカーボン工場跡倉庫を会場として利用するのか、理解しにくかった。倉庫という密室で音響効果がよいと言う事を見せたかったかもしれないが企画倒れの感は歪めなかった。むしろ、突然の大音響にびっくりしたのか、「住民」のコウモリが飛び交う姿が印象的であった。

ただ、当夜は、『ナルニア国ものがたり』の名前の由来といわれるナルニ市街歴史地区(写真8)を表敬訪問し、狭い階段を登った中世の狭い部屋にディナーが用意され、また街灯として



(写真8 ナルニ市街歴史地区)



(写真7 こうもりも飛び交う HeritaS. G.L. カーボン工場跡 (Narni Scalo) 倉庫でのコンサート)

「ロウソク」をかざし中世都市の雰囲気をかもし出す趣向、夜間にもかかわらず自慢のピザを「世界の人」振る舞うのを本当に楽しそうに焼く職人、教会聖歌隊による合唱、村人による民族ダンス、中世の騎士の鎧をまとった村一番のイケメン青年など、共同開催地のナルニ市の町あげての大歓待に、一同大いに感激したが、ホテルへの帰着は、またまた深夜に及んだ。

というのも、ハードなスケジュールのわりに、その会議や行事設定と進行は、「イタリア」的というかおおらかというか、結構「アバウト」で適当であった。大体、会議や見学の全体の進行が、予定時間より一〜二時間遅れは当たり前。ハードであるが「アバウト」なスケジュールの合間に、必ず午前の一〜一時頃コーヒブレイク（ワインとクッキー等お菓子付き）、お昼の二時ごろランチ（もちろんワイン付き）、四〜五時午後のコーヒブレイク（またワイン付）、八・九時から二時間かけてディナー（またまたワイン）が必ず準備された。飲んで食べる事を大事にし楽しむという「イタリア式」の歓待なのかわからないが、全体の進行は遅れに遅れ、ホテル着は早くて夜の一時頃。

しかし、こうした「アバウト」な運営の背景には、主催者側のそれなりの事情もあった。イタリア側の主催者が、少数の教授と通訳・院生を除けば、その多くが（英語がしゃべれるはずの？）大学生と一般市民のボランティア等が運営を担った。さらに一般に言われるラテン系の「時間にルーズ」で「組織的に動くのが苦手」という「豊かな個性」も加わって「IYTT（ジャストインタイム）」と「チーム（集団主義）」を「信条」とする「日本人」参加者にははなはだ「ルーズ」で「いい加減」に映

るのである。しかしながら、バスの集合などをよくよく見てみると、予定より一時間遅れで現場の実質的な「責任者」である博士課程の「イタリア人」らしからぬ「真面目な院生」が、ちゃんと「最終的チェック」をして彼らなりの「ルール」で運営されているのであった。

他方、参加者側にも問題がある。集合時間にちゃんと揃っているのは、だいたい「日本人」と一部の参加者か「お喋りに興じている人」ぐらい。だいたい、三〇分位過ぎると、どこからもなく参集し、一時間ぐらい遅れてくる「常連さん」がくると「全員集合」となる。四〇カ国、中南米の「ラテン系」のおおらかな人々、みるからに自己主張とプライドが高そうなフランス人グループ、「自由」を満喫しているのか旧東欧の人達、「お国柄」か「単なる個性」なのか判らないが、これらの人々をまとめるのは、「至難の技」であろう。逆に「J・T」と「チームプレイ」を「後生大事」と信じる「日本人」は、「世界の異端児」であるようにも思えた。

四 ローマ産業遺産の見学での「とまどい」

しかし、何とはなしに、産業遺産の保存・再利用に対する考え方の日本との違い、特に都市の「ラウンドスクープ」形成での「違和感」を感じ始めたのは、九月一七日の日曜日に催されたローマ郊外の工業地域での産業遺産の保存・活用の見学であった。珍しくフリータイも予定され、参加者は大いに期待した。

当日の朝、いつものほぼ一時間半遅れで出発したバスの車内は、ローマに近づくにつれ歓声があがり大いに盛り上がった。しかし、写真で見慣れた風景が次第に遠のくに連れて、何処に連れて行かれるのだろうかという様子に変わった。

私たちは、テウヴェレ河沿いのローマ南部の「Ostense - Testaccio 工業地区」に到着した。冷静を装い私たちは、ローマ Aula Magna 大学で、一九世紀中頃から開始され二〇世紀に本格的に開発された「Ostense - Testaccio 工業地区」の歴史と変遷に関する報告講演の講義を受け、その後「Ostense 旧工業地区」の産業遺産である旧 Montemartini 発電所の美術館への再利用（写真9）と今後開発が予定されている旧ローマ卸売市場跡（写真10）を視察した。

前者の Montemartini 発電所は、一九二〇年代に完成し、かのムッソリーニも視察した由緒ある発電所であり、二〇〇〇年には彫刻美術館に再利用されたものである。確かに、現在には使われていない巨大な発電設備のもとに、ローマ時代からの多様な彫刻が展示されており、黒い旧電力設備と大理石の白い彫刻とのコントラストが印象的であるが、美術館としては変わった趣向のようにも思えた。というのも、近代的な巨大な発電設備に圧倒され、せつかくの彫刻もかすんでしまっているのではないか、という感想も持った。むしろ、なぜ、発電所を美術館として、わざわざ再生・再利用するのであるという単純な疑問をもった。

他方、未着工のまま保存されている旧ローマ卸売市場跡は、確かに古代ローマ風の建物であるが、一九三〇年代の卸売市場



(写真9 Ostiense 旧工業地区で美術館となった旧 Montemartini 発電所とその内部)



(写真10 Ostiense 旧工業地区で再利用が予定される旧ローマ卸売市場跡とその内部)

でありわざわざ保存する意味はどこにあるのだろうか。むしろ日本の参加者から「なんでも残せばいいと言うものでもないのではないか?」という疑問の声も聞かれた。まあ、そう言われれば、日本であれば、日頃、さつさと取り壊されマンションかショッピングモールのような新たなビルディングが建てられる光景を目している「日本人」参加者には、産業遺産の保存・再利用するよりも「開発」のほうが、効率と費用(コスト)面からみれば当然であるように思えるかもしれない。工業地帯の一角には使用されなくなつたガスタンクが骨組みだけ残され保存されている姿も、私の目には「風変りな」風景(ランドスケープ)に見えた。一九三〇年代の工業地帯の発電所・ガスタンクや卸売市場などの産業遺産をわざわざ保存・再利用し都市の「ランドスケープ」として再生する意味はどこにあるのだろうか?

しかし、心ははや午後のローマ市内の自由行動に移っていた。バスは、私たちの期待を乗せローマの中心の「コロッセオ」の近くのバス駐車場へ。イタリア統一を記念して一九一一年完成した有名な「ヴィットリオ・エマヌエレⅡ世記念堂(Vittorian)」を夜の集合場所と決め、しばしの自由行動へ参加者は思い思いの場所に散会した。いつものスケジュールの遅れから私たちは、近くの世界遺産「フォロ・ロマーノ」へ(写真11)。紀元前から「ローマ時代」の中心地であり、凱旋門や神殿の人類の遺産に圧倒されながら、ここにカエサル(シーザー)、クレオパトラやアウグストなどがいたのと同じ場所に立っているというだけで、「ローマ時代」への郷愁と興奮を覚えた。しかも、この「フォロ・ロマーノ」は、まだ発掘が進められていた。しかし、



(写真11 デイナ会場の「ヴィットリオ・エマヌエレⅡ世記念堂」のライトアップ)



(写真11 人類の歴史的遺産「フォロ・ロマーノ」)

突如の猛烈な雨のためにミケランジェロの意匠の美しい「カンビドーリオ広場」にある一五世紀に創設された世界最古の美術館である「カンビドーリオ美術館」内で雨宿り。地上三階・地下三階の予想したより大規模な美術館である。ローマには、世界級の人類史上の遺産が多くあり、また多くが埋もれたまま残っている。なんにも、午前中にみた二〇世紀の旧発電所やガスタンクや卸売市場をわざわざ残さなくてもという「気持ち」が頭をかすめた。どう考えても二〇世紀の工場やガスタンクの鉄骨は、これらの人類の歴史的遺産に比べると霞んでしまう。でも、考えてみれば一九世紀から二〇世紀の工業化のための工場や大量生産の産業遺産は、世界レベルの人類の文化・歴史的遺産からみればこれぐらいの重みしかないのかもしれない。ふと、一九世紀から二〇世紀の工業化は、人類史からみれば人々に何を与え、何を残したのであろうかと思う。

夜の六時に集合ということで、「ヴィットリオ・エマヌエレ二世記念堂」前に行ったが、相も変わらず、参加者はなかなか集合しない。いつもの一時間遅れぐらいでイタリア人らしからぬ「例の真面目な院生」が来て、やっとディナー会場へ。しかし、この日は、なんと「ヴィットリオ・エマヌエレ二世記念堂」内にあるレストランでの食事であった。通常、「記念堂」の開館は夜五時までである。いわば「TICCIH 2006」参加者だけの「特別貸し切り」であった。この「記念堂」はローマの町並みが一望できることで有名なランドマークでもあるが、ライトアップされた「コロッセオ」、「ヴェネツィア宮殿」などの夜景を堪能できた。こうした経験は生涯二度ないだろうと思いつつ、テル

二のホテルへの帰着は、またしても深夜となった。

しかし、ローマでの産業遺産の保存・再利用への「とまじり」は、イタリア北部の産業遺産の現地視察（PostCongress Itinerary）で、吹っ飛んでしまうこととなる。現在のイタリアが面白いのは、やはりローマのような大都会ではなく地方の中小都市にあった。ポストコンGRESSツアーで見学することとなるプラト（Prato）やブレシア（Brescia）での産業博物館の活用による地域活性化、世界遺産クレスピタッタ（Crespi d'Adda）などでの「カンパニータウン」の保存による地方都市開発、さらにジェノヴァ（Genova）やトリノ（Torino）などの産業遺産の保存・再生による大規模な都市再開発。これら一九・二〇世紀の産業遺産は、テルノと同じように、地域の「アイデンティティ」の再生や都市の「ランドスケープ」形成に重要な役割を果たし、別の意味でローマでの人類史の世界的遺産と同じぐらい輝いていたのである。